

# 日本語文法における形容詞

仁田義雄

「形容詞」という用語は西欧語の文法用語である。それは名詞との近さを強調した命名である。しかし、日本語の形容詞は用言の一種である。試行錯誤を繰り返して、「形容詞」認識を進展させた日本語文法研究小史

## 一 はじめに

現在、動詞とともに、体言に対して、用言の一種として扱われているいわゆる形容詞が、過去の日本語文法研究史においてどのように認識されてきたのか、そして、現代の日本語においてどのように使われているのか、本稿では、この二つのことについて素描する。

## 二 日本語文法研究史における形容詞

### 1 江戸期における伝統的な文法研究での取り扱い

いわゆる形容詞は、動詞とともに装に属し、いわゆる活用を持つ、といったこととともに、「事をさだめ」といった統語的特性において、取り出されている。

次に、鈴木胤の考え方について触れておく。胤は、『言語四種論』（二六三刊）において、語を「体ノ詞、形状ノ詞、作用ノ詞、テニラハ」の四類に分け、形状ノ詞は、イの韻で終わり、物事の有様・形状を表すもの、作用ノ詞は、ウの韻で終わり、人や物の動き・働き・変化を表すもの、としている。概略、形状ノ詞が形容詞に、作用ノ詞が動詞に当たる。形状ノ詞と作用ノ詞は、「用ノ詞」あるいは「活用ノ詞」などとして、大きくは一括されている。

引き続き、富樫広蔭について瞥見する。広蔭は、『詞玉橋』（二八六、初稿、成で、語を「言、詞、辞」に三分類している。言は体言に、詞は用言に当たる。さらに、詞は、今の形容詞に当たる「説容体詞」と、動詞に当たる「説動用詞」とに分かれていた。詞は、活用を有すること、「詞以テ物事ノ動用容体ヲ説決メ」（二巻、一ウ）といった、語性において特徴づけられる。

もつとも、成章と胤と広蔭では、状態動詞「有リ」（現在では「有ル」）の所属が異なる。成章と広蔭では、いわゆる動詞

日本語文法研究史における形容詞認識に対する概観のまず手初めとして、江戸期における伝統的な文法研究での取り扱いを瞥見する。具体的には、富士谷成章、鈴木胤、富樫広蔭について見てみる。

まず、富士谷成章から見ていく。成章は、語を「名、装、挿頭、脚結」に四分類し、『あゆみ抄』（二七六刊）において、「名をもて物をことわり、装をもて事をさだめ、挿頭、脚結をもてことばをたすく」（二巻、おほむね、一オ）と述べている。名が体言に、装が用言に、挿頭が代名詞・副詞・接統詞・感動詞・接頭辞に、脚結が助詞・助動詞・接尾辞に、おおよそ対応する。

の一種であつたが、胤にあつては、イ韻で終わることによつて、形容詞とともに形状ノ詞の一種に入れられている。

以上見てきたように、江戸期の伝統的な文法研究では、形容詞は、いずれも、動詞とともに、活用の点、語性の点から、いわゆる用言の一員とされている。もつとも、鈴木胤には、作用ノ詞（いわゆる動詞）を用ノ詞の典型とし、「形状ハ体ニ近キ所アリ。」（三オ）といった発言がある。

### 2 蘭文典および洋式日本文典での取り扱い

#### 2・1 蘭文典および蘭文典模倣の文典

まず、江戸期の蘭文典および蘭文典を模倣した文典での形容詞の取り扱いを瞥見しておく。日本語文典でない蘭文典について触れるのは、明治初期の洋式日本文典の源を確認しておくためであり、そもそも、形容詞という用語が西洋文法に由来するものだからである。用語の由来は、通例、用語の内包にも少なからず影響を与えてくる。

蘭文典としては、藤林普山の『和蘭語法解』（二八三刊）を取り上げる。彼は、オランダ語の品詞を九つに分け、その中に、「名言」と動詞に当たる「活言」を設定している。名言は、今の名詞と形容詞を含み、名詞に当たるものを「自立名言」、形



容詞に該当するものを「附屬名言」と呼んでいる。そして、附屬名言については、「即ち附屬名言ノ義ニシテ。自立名言ニ附屬シ。此ヲ形容スル所ノ用言ナリ。…」「強き胃」「静なる海」「ト云ガ如ク。和語ニ在リテハ「キ」或ハ「ナル」杯ノ履ヲ附テ訳セズバ有ベカラザルモノナリ」(上巻、元ウ・元オ)と説明している。

蘭文典を模倣した日本文典として、鶴峯成申の『語学新書』(八三刊)を瞥見しておく。鶴峯は、語を九種に分け、その中に、名詞に当たる「実体言」、主に形容詞に該当する「虚体言」、動詞に対応する「活用言」などを設定する。そして、虚体言については、「虚体言は、実体言に附屬して、其深淺輕重などを形容する辞にて、漢の虚字也。此に副上、副下、比較の三等あり。」「(四オ)と述べ、「ふかき心」「咲かざる花」のように装定(連体用法)で使われる場合だけでなく、「川風寒し」のように述定(述語用法)の場合をも取り込んでいる。

## 2・2 明治極初期の洋式日本文典

明治極初期の洋式日本文典として、主に田中義廉と中根淑を取り上げる。

彼らに先行するものに、古川正雄(絵入智慧の環)(八三刊)がある。古川は、「ながき夜、長夜、ひと月、降る雪」のよう

な例を挙げ、これらを、「形容詞」と言うとも述べながら、「さまことば」と呼んでいる。また、虚体言という用語の使用例をも紹介している。

鶴峯とともに、古川は、未だ形容詞体言型の言語における捉え方の影響を強く残している。

田中義廉は、『小学日本文典』(八六刊)の中で、語を七種に分け、「名詞(又ナコトバ)」、「動詞(又ハタラクコトバ)」などとともに、「形容詞(又サマコトバ)」を導入している。形容詞については、「良き人」「大ナル家」「小川」「右ノ手」「流ル、水」「咲ク花」などの例を挙げ、「形容詞は、名詞の現したる、動、植、事、物の性質、形状を、精く示すものにして、常に、名詞の前にあり。」「(卷三、三三オ)と述べている。

また、中根淑も、『日本文典』(八六刊)において、語を八種に分け、「名詞」「動詞」などとともに、「形容詞」を設けている。形容詞については、「浅き川」「花ノ姿」「路漫々」「御殿」「相視テ愕然タリ」などの例を挙げ、「形容詞ハ、大抵名詞ノ上或ハ下、若クハ文中ニ在リテ、事物ノ大小長短精粗厚薄等ノ形状ヲ精密ニ形ス者ナリ、又時トシテ代名詞ニ就キテ形容ヲナスコアリ」(巻上、四ウ)と述べている。

田中にあつても中根にあつても、形容詞は、名詞を修飾限

定するという働きにおいて取り出されている。したがって、「良き人、浅き川」といった形容詞のみならず、「右の手、花の姿」のように、「名詞十ノ」が名詞を修飾限定していることにおいて、形容詞の一員に取り込まれている。このことは、「赤く染む、浅く掘る」(前者は田中、後者は中根の例)のよう

なものを、副詞に入れることになる。事実、田中は、「赤キ糸といふとき、糸の性質を、示すものにして、形容詞なれども、糸ヲ赤ク染ムといふときは、副詞となるが如し。」「(巻一、二五ウ)と説明している。

## 3 大槻文彦

次に、『広日本文典』『広日本文典別記』(八六刊)を著し、西洋文典と日本の伝統的な文法研究との統一・折衷を図った大槻文彦を見てみる。

大槻は、『広日本文典』において、語を八品詞に分け、その中に、「名詞」「動詞」「副詞」などとともに、「形容詞」を導入している。形容詞については、「形容詞(又、形状言)ハ、事物ノ状態、性質、情意、等ヲ形容シテイフ語ナリ。例ヘバ、「山、高シ。」「海、深シ。」「ノ高シ」「深シ」ハ、状態ヲ形容シ、「是、善シ。」「彼れ、悪シ。」「ノ善シ」「悪シ」ハ、性質ヲ形

容シ、「逢ふは、嬉し。」「別るは、悲し。」「ノ嬉し」「悲し」ハ、情意ヲ形容スルガ如シ、因テ形容詞トイフ。」「(七頁)と述べるとともに、活用に触れ、「形容詞モ、動詞ノ如ク、語尾ニ、活用アリ、法アリ。」「(七頁)とも述べている。

大槻は、「心の善き人、名の悪しき者」のような、名詞の上に連なつて、名詞を限定する用法を連体法と呼び、西洋流に形容詞を取り出すのなら、この種のものがそがふさわしい、という意味合いを込めて、連体法のものこそ西洋語の Adjective に当たると述べるとともに、西洋語の Adjective と日本語の形容詞との異なりを十分認識していた。『広日本文典別記』において、「国語ノ形容詞ハ、洋文法ノ訳語ニイフ形容詞ト、意義ハ相似タレド、語体、用法、甚ダ異ナリ」(七三頁)と述べているのは、そのことを物語っている。さらに、同書において、

英語ノ Adjective ハ、大抵、名詞ニ冠ラセテ、其形状性質等ライフ。我が形容詞モ、名詞ノ形状性質等ライフハ、相同ジケレド、語ノ成立ニ至リテハ、甚ダ相異ナリテ、語尾ニ変化アリ、法アル。動詞ノ如クニシテ、且、名詞ノ後ニ居テ、文ノ末ヲモ結ベリ。…サレバ、我が形容詞ハ、Adjective verb トイフベク、直ニ「形容動詞」ト命名セバ、

Adjectiveノ訳語ノ形容詞ト混ゼズシテ、可ナラム、トモ考フルナリ。

我が形容詞ノ特性ハ、右ノ如シ、然ルニ、世ノ洋文法ヲ以テ、我が文法ヲ論ズルモノ、彼ノ語法ノ先入シテ主トナレルガ故ニ、之ヲ肯ハズシテ、徒ニ、「高き、深き」ハ、Adjectiveナリ、「高く、深く」ハ副詞ナリ、「高し、深し」ノ「し」ハ、一個ノ助動詞ノ如キモノナリ、ナドイヒテ、各自、別語ナリト誤謬シ、一語ノ語尾ノ変化ナルヲ曉ラザルモノ多シ。サレド、「高き」「深き」「ヲ独立ニ用キ、名詞ニ冠シテ、「高き山」「深き海」「ナドイフ時ニロン、Adjectiveトモ言ハレ、「山ぞ高き」「海ぞ深き」「或ハ、「山こそ高けれ」「海こそ深けれ」「ナド、文ヲ結ブラバ如何ニカスル。(二〇一頁)

と述べ、「高き、深き」は形容詞、「高し、深し」は副詞、といった従来の取り扱いを批判している。大槻の形容詞認識は、田中や中根のそれに比べて、数段進歩したものである。形容詞は、動詞と同様、自らの形を変えることによつて、連体用法にも述語用法にも成りうるものとして捉えられている。大槻は、動詞に対する形容詞の異なりとして、形容詞が「時」を持たないことを取り上げている。動詞と異なつて、形容詞

にテンスを認めない点は、次に触れる山田孝雄<sup>じゆう</sup>につながるところである。

大槻の形容詞観は、形容詞を、活用を有することによつて、動詞との共通性の中に捉えることにおいて、江戸期の伝統的なそれにつながり、所有する幾多の機能のうち、名詞を修飾する機能を取り立てることにおいて、西洋文法の洗礼を受けたものである。

#### 4 山田孝雄と松下大三郎

明治以降、日本語文典を近代的で体系的なものに作り上げた者に山田孝雄と松下大三郎がいる。山田は、富士谷成章などの伝統的な文法研究を十分考慮に入れ、西洋文典や西洋の論理学・心理学をも十分見据えながら、独自のしかも雄大な理論体系の構築を図り、松下は、文法研究ばかりからではなく、近代西洋の諸科学からの養分を十分自分の物として吸収しながら、独自の用語と強靱な科学精神で普遍文法を志向した。両者に共通する形容詞認識は、動詞との共通性の重視であり、西洋語の Adjective との異なりに対する強調である。

まず、山田孝雄を取り上げる。山田は、『日本文法学概論』(三六六頁)において、

形容詞と動詞の類同性を取り立てながら、山田は、verb に対応する用語としての《動詞》を、両者に共に引き当てることはしなかった。それを行ったのが、松下大三郎である。

引き続き、松下大三郎について見ておく。松下は、『改撰標準日本文法』(二六六頁)において、いわゆる形容詞と呼ばれている一類を、動詞の一種として扱う。松下の言う《動詞》は、動作を表す《動作動詞》と状態を表す《形容動詞》とに分かれる。《形容動詞》としては「遠し、静に」などが挙げられ、これが、一般に言われる形容詞にほぼ当たる。また、《動作動詞》は、「行く、笑う」のような《運動性》のものと、《静止性》のものに分けられ、さらに、《静止性》の動作動詞は、「居る、父たり」のような《意志的》なもの、「在り、父なり、静なり」のような《自然的》なものに分かたれている。そして、一般に言う形容詞をも含む《動詞》については、

動詞は作用の概念を表して或るものに対する判断を下す詞である。「月出づ。風吹く。花美し。空青し。」「の「出づ」「吹く」「美し」「青し」の類だ。皆、月、風、花、空を主体

にして其の作用をあらはして居る。(二九頁)

と述べられている。いわゆる動詞もいわゆる形容詞も、松下においては、判断を下す働きを有している詞ということで、

元来、この用言といふものは西洋の文法にいふ所の verb に該当するものなり。…元来 verb は説明陳述する力を有してあることが、その本質なれば、わが国にては所謂形容詞も陳述の力を有するものなるが故に、それが用言の一部にして同時にそれは verb にてあらざるべからざるなり。英語、独逸語などの動詞(verb)と形容詞(adjective)との差は動詞には陳述の力含まれ、形容詞には陳述の力欠けたる所より区別せられてあるものなり。然るに、わが形容詞は動詞と同じく陳述の力含まれてあり。然るが故にわが所謂形容詞は彼の adjective とは全く性質を異にするものにして、verb ならざるべからざるものなり。(四四頁)

と述べている。ここに見られるのは、形容詞と動詞の類同性への指摘である。形容詞は、《陳述》の力、すなわち判断(思想)をまとめ上げ、文の成立を準備する働きを有することにおいて、動詞と共通させられることになる。同様のことが、『日本文法論』(二六六頁)でも語られている。

山田は、形容詞の動詞に対する重要な異なりとして、「これらの詞(注:形容詞のこと)のあらはす陳述はすべて没時間的に発表せらる。」「(概論三〇頁)と、その時間的性格のあり方の違いを指摘している。

一類化される。さらに、判定を下すという働きについては、判定性 凡ゆる事柄は主体と作用とに分解して考へられる。動詞注、松下の言う動詞のことは其の作用を表すのである。作用の概念は概念の性質上必ず判定性を持つて居る。「1今宵は月出づ。」…の1の「月出づ」は…「今宵」…を判定の対象にして其れを判定してゐる。…判定性とは概念から謂ふので動詞から謂へば判定性は即ち叙述性である。(二七―二八頁)

と説明している。また、松下の《動詞》は「作用を叙述的に表す詞」とも説明される。いわゆる述語を、松下は《叙述語》と呼んでいる。そのことから分かるように、《動詞》は、《叙述語》に成りうる語である、ということになる。

松下にあつては、いわゆる形容詞も、判定を下し作用を叙述することによって、動詞とともに一類化される。

いわゆる形容詞といふゆる動詞との異なりを示すものとして、松下にあつても、「行く、笑う」が時間における変化であり、「居る、在る」が時間における不変化を表すのに対して、「しかし」「雪は白い」の「白い」は時間には要らない。(三三頁)と述べ、両者の担う時間的性格のあり方の異なりを取り出している。この点も山田と同断である。

山田にあつては、形容詞も、陳述の力を有し、述語に成り、文成立に深く関わることに於いて、動詞と類同的であるとされ、松下にあつては、判定を下し、作用を叙述し、述語になることにおいて、動詞の一種とされることになる。ともに、両者は、本稿の物言いで言えば、述定性を取り立てることによって、形容詞を措定している。

### 三 現代日本語文法における形容詞

以上粗々見てきたように、いわゆる形容詞は、日本語文法研究史の中で、まず、活用すること、働くことにおいて、動詞とともに用言の一種として取り扱われ、その後、西洋文典の影響により、名詞を修飾する働きを重視することによって、《形容詞》と名づけられ、動詞から取り立てられた。また、体言との近さの指摘もあった。さらに、述定の働きをも認めながら、装定の働きの取り立てによって定立する大槓のような折衷的扱ひもあった。また、山田や松下のように、述定性を重視する立場もある。

#### 1 形容詞と動詞の装定用法・述定用法

名詞を修飾限定する用法を《装定》と呼び、述語として働いても、このことは、何も動詞と形容詞にあつて、この両者が同じ意味合いを持つて存在している、ということの意味しはしない。既に予想され直感されているように、述定と装定の持つ意味合いは、動詞と形容詞では異なる。動詞と形容詞における述定・装定の占める位置を計る一つの試みとして、両者の使用頻度を数えてみた。そのため、ごく小さな調査をした。五一〇頁余りの文庫本(講談社「ミステリー傑作選4」)を使って、述定・装定両者の数を調べてみた。動詞については、その一割ほどを調査対象にし、形容詞については、全頁を調査した。

表1

	動詞	述定	装定
形容詞	二五〇(37%)	八九〇(85%)	一五九(15%)
			四二八(63%)

①の傍線部および②の「寒い」が形容詞の装定の例であり、②の傍線部が形容詞の述定の例である。

③ 長い間軍隊に取られ、出世の機会を失い、しかも、開業する資金もなく、小さな私立病院に勤めている須藤には、酒を飲んで話しても、世をすねたいやみがあつたようだった。(黒岩重吾「湿地帯」)

③の「取られ」「失い」「飲んで」「話しても」「あつたようだった」が動詞の述定の例であり、「開業する」「勤めている」「すねた」が動詞の装定の例である。

動詞にも形容詞にも、述定と装定がともに存在する。もつ

といったような、現れ方が観察された。実数は、調査対象が変われば変わってくるであろうし、パーセントの数字も厳密に考える必要はない。おおよその傾向が分かれば、それで十分である。動詞にあつては、述定は、装定の五、六倍近くあり、逆に、形容詞にあつては、述定は、装定の約半分ほどしか出現しない(このようなことも概略予想が付く)。動詞の中

心は述定用法であり、それに対して、形容詞の本領は、やはり名詞を修飾限定する装定用法に在る。

## 2 形容詞のタイプと装定用法・述定用法

装定用法と述定用法のあり方は、形容詞全般にわたって同じなのである。次に、そのことについて少しばかり見ておく。まず、形容詞を、属性形容詞と評価・判断形容詞と感情・感覚形容詞とに分ける。

それぞれについて、一二実例を挙げておく。

- ① 脾臓の新しい手術方法を考案し、(黒岩)
- ② 夕方の船宿はいそがしい。(佐賀)
- ③ 属性形容詞の装定の例で、②が述定の例である。また、
- ④ 「あなたの相棒はすばらしい腕前だな。」

(生島治郎「死者たちの祭り」)

- ⑤ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ⑥ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ⑦ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ⑧ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ⑨ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ⑩ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ⑪ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ⑫ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ⑬ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ⑭ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ⑮ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ⑯ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ⑰ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ⑱ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ⑲ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ⑳ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ㉑ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ㉒ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ㉓ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ㉔ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ㉕ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ㉖ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ㉗ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ㉘ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ㉙ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ㉚ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ㉛ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ㉜ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ㉝ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ㉞ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ㉟ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ㊱ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ㊲ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ㊳ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ㊴ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ㊵ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ㊶ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ㊷ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ㊸ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ㊹ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ㊺ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ㊻ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ㊼ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ㊽ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ㊾ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)
- ㊿ 須藤の飲みっぷりは相変わらず凄い。(黒岩)

(筒井康隆「アフリカの爆弾」)

- ① 宇佐見は、志奈子の身体が欲しかった。(笹沢)

## 3 名詞との関連

次に、名詞との関連について、少しばかり触れておく。属性形容詞(温度・味覚感覚を表すものも含む)には、

- ① 甘酒、荒磯、高山、安物、早瀬、近場、軽石、強火、弱気、古本、若者、薄着、細道、浅瀬、深情け、熱燗、寒空、柔肌、堅物、悪者、広口、長靴、丸顔、暗闇

のようなものが存する。これは、「行く春」のような二語的存在ではなく、「形容詞語幹十名詞」という語構成を持つ一つの複合名詞である。この種の複合名詞の形成には、ク活用という形態的なことが関係しているだろうが、「\*辛事」のようなものが存しないことから「凄腕」はあるが、感情・感覚形容詞に対する属性形容詞の特性と考えられる。一語たる名詞の内部構成要素として、その語幹が使用されることから、属性形容詞の名詞との関連性が指摘できよう。

以上、日本語文法研究史の中で見てきたことは、認識の進展であるとともに、いわゆる形容詞のあり方のどこに焦点を当てるかの違いでもあった。

(につたよしお／日本語学)

などが、感情・感覚形容詞の例である。⑤が装定の例であり、⑥が述定の例である。それぞれの装定・述定の現れ方は、次の表のようであった。

表2

属性	装定	述定
評価・判断	三二五	九九
感情・感覚	七六	一〇二
	二七	四九

これも厳密な数字は必要ない。概略の傾向が分かればいい。属性形容詞と評価・判断ならびに感情・感覚形容詞では、装定と述定の現れ方に異なりがある。用法の中心が述定ではなく装定にある、というのは、属性形容詞のみであり、逆に、評価・判断形容詞と感情・感覚形容詞では、述定が装定を上回る。特に、感情・感覚形容詞では、述定が装定の倍近く存する。装定を本領とするという形容詞のあり方は、属性形容詞にこそ当てはまり、ある意味で、感情・感覚形容詞は、動詞への近さを有する。装定優位である、という形容詞の全体的なあり方(表1)からすれば、かえって、形容詞の中心は属性形容詞であると言える。

## 『言語』次号(4月号)予告 [3月15日発売]

### \*特集・手話の世界

- これから手話を学ぶ人のために.....米川明彦
- 手話とはどういう言語か.....神田和幸
- 手話の文法.....市田泰弘
- 手話の音韻論.....森 壮也
- 手話の神経心理学的基盤.....河内十郎
- 手話の習得過程.....鳥越隆士
- 世界の手話の対照言語学.....シンシア・パナキ
- 手話であらわすユーモア.....木村晴美
- これだけは覚えておきたい手話.....木村晴美
- 手話の詩.....谷 千春
- 手話語彙のデータベース化.....大下真二郎

- 巻頭エッセイ.....栗原 彬・加賀美幸子・古舘忠夫
- 花のコミュニケーション.....大内 和
- 日本詩歌のリズム構造(続).....松浦友久

- \* 連載 ■ 地の歳時記(4月).....水沢 周
- 連載 ■ 21世紀のサイエンス④.....雨宮正彦
- 連載 ■ ベトナム語のすすめ④.....岩井美佐紀
- 連載 ■ 社会言語学のキーテーマ④.....渋谷勝己
- 連載 ■ 池田清彦の虫の目人の目⑥.....池田清彦
- 連載 ■ 漢字の履歴書⑥.....川嶋秀之
- リレー連載 ■ インターネット言語学情報④.....杉浦正利
- リレー連載 ■ 言語ジャーナル④オランダ.....猪股謙二
- リレー連載 ■ 読書日記⑥.....細川哲士
- リレー連載 ■ 近世のことわざ探訪⑥.....杉本和寛